

JOHANN SEBASTIAN BACH
Sonate für Violine solo Nr. 2 a-moll, BWV 1003

Gerhart Hetzel, Violine

Stipendiat des Kulturreises im BDI

GISELHER KLEBE

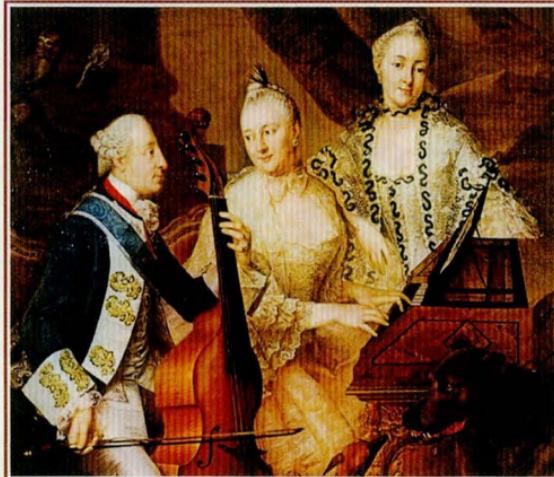
Stipendiat des Kulturreises im BDI

Römische Elegien op. 15 (1952)
für Sprecher, Klavier, Cembalo und Kontrabass

Bernhard Minetti, Sprecher · Carl Seemann, Klavier
Edith Picht-Axenfeld, Cembalo
Franz Ortner, Kontrabass
Dirigent: Rudolf Albert

Jahresgabe 1962 des Kulturreises im Bundesverband der Deutschen Industrie e. V.

ARCHIV
PRODUKTION
JOHANN SEBASTIAN BACH
TRIPELKONZERTE · KONZERT FÜR OBOE D'AMORE
TRIPLE CONCERTOS · CONCERTO FOR OBOE D'AMORE



AURÈLE NICOLET · GERHART HETZEL · MANFRED CLEMENT
MÜNCHENER BACH-ORCHESTER
KARL RICHTER

JOHANN SEBASTIAN BACH

(1685—1750)

Seite / Side / Face 1

Konzert für Flöte, Violine, Cembalo und Streicher a-moll, BWV 1044

Concerto for Flute, Violin, Harpsichord and Strings in A minor

Concerto pour flûte traversière, violon, clavecin et orchestre à cordes en la mineur

1. Allegro

9'10

2. Adagio, ma non tanto, e dolce

6'16

3. Alla breve

7'26

Solo: Fl. trsv., VI., Cemb.; VI. I (F), VI. II (G), Vla. (6), Vlc. (4), Ch. (3).
Ed.: Breitkopf & Härtel's Partner-Bibliothek, 4328 (Urtypusdruck), Wiesbaden i. d. R.

Konzert für Oboe d'amore, Streicher und Bassoon continuo A-dur

Concerto for Oboe d'amore, Strings and Bassoon Continuo in A major

Concerto pour hautbois d'amour, orchestre à cordes et basson
continuo en la mayor

Rekonstruktion nach dem Cembalokonzert BWV 1055
Reconstruction after / après BWV 1055

1. ohne Tempomarkierung

without tempo indication

5'11

Gesamzeit der 1. Seite mit Pausen: 28'13

Seite / Side / Face 2

2. Larghetto

5'05

3. Allegro ma non tanto

4'50

Ob. d'amore solo, VI. I (D), VI. II (A), Vla. (6), Vlc. (4), Ch. (3); Cemb. continuo
Ed.: Joh. Sels, Bad., Neue Ausgabe österreichischer Werke, hrsg. von Johann Sebastian Bach-
Institut und vom Bach-Archiv Leipzig, Ser. VII, Band 7.
Mit kritischen Berichten: Verhandlungen Solokonzerten in Rekonstruktionen,
hrsg. von W. Endres, Bärenreiter-Verlag, Kassel 1970/71 (NBA).

Konzert für drei Violinen, Streicher und Bassoon continuo D-dur

Concerto for three Violins, Strings and Bassoon Continuo in D major
Concerto pour trois violons, orchestre à cordes et basse continue
en ré majeur

Rekonstruktion nach dem Konzert für 3 Cembali, BWV 1064

Reconstruction after / après BWV 1064

1. Allegro

7'03

2. Adagio

6'46

3. Allegro

4'47

VI. concerto 1—III; VI. I (F), VI. II (G), Vla. (6), Vlc. (4), Ch. (3); Cemb. continuo
Ed.: NBA, VII, 7 (W. Fink), Bärenreiter-Verlag, Kassel 1970/71

Gesamzeit der 2. Seite mit Pausen: 28'43

Aurèle Nicolet

Querflöte / flute / flûte traversière

Manfred Clement

Oboe d'amore / hautbois d'amour

Gerhart Herzell · Walter Forchert · Rubén González

Violine / violin / violon

Karl Richter

Cembalo / harpsichord / clavecin

(William Dowd, Paris 1790; nach Paul Taskin, Paris, 18. Jhd.
aus dem Besitz von Egon K. Wagnleitner, Wüden/Schweiz)

Münchener Bach-Orchester

Leitung / Direction:

KARL RICHTER

Aufnahme / Recording / Enregistrement: München, Herkulesaal der Residenz, 2.—5. 6. 1980

Produzent und Aufnahmeleiter / Producer and Recording Supervisor:

Direktor de producción y de grabación: Dr. Gerd Pleibach

Tonmeister / Recording Engineer / Ingénieur du son: Hans-Peter Schwegmann

Redaktion / Editor / Rédition: Roswitha Cervone

Abbildung auf der Titelseite / Illustration on the title page / Illustration sur le frontispice:

Ferdinand Götzsch - Kammermusik am bayerischen Hofes

Etschdrucke: Archiv für Kunst und Geschichte, Berlin

Art Direction: Lutz Bode, Hamburg

ヨハン・セバスティアン・バッハ

Johann Sebastian Bach (1685-1750)

フルート、ヴァイオリンとチェンバロのための協奏曲 イ短調 BWV1044

Concerto for Flute, Violin, Harpsichord and Strings in A minor, BWV1044

① 第1楽章: Allegro

[9:13]

② 第2楽章: Adagio, ma non tanto, e dolce

[6:15]

③ 第3楽章: Alla breve

[7:31]

オーボエ・ダモーレ協奏曲 イ長調 BWV1055a

(チェンバロ協奏曲 BWV1055の復元曲)

Concerto for Oboe d'amore, Strings and Bassoon Continuo in A major, BWV1055a

④ 第1楽章: —

[5:11]

⑤ 第2楽章: Larghetto

[5:05]

⑥ 第3楽章: Allegro ma non tanto

[4:50]

3つのヴァイオリンのための協奏曲 ニ長調 BWV1064a

(3台のチェンバロのための協奏曲 BWV1064の復元曲)

Concerto for 3 Violins, Strings and Bassoon Continuo in D major, BWV1064a

⑦ 第1楽章: Allegro

[7:02]

⑧ 第2楽章: Adagio

[6:46]

⑨ 第3楽章: Allegro

[4:47]

無伴奏ヴァイオリン・ソナタ 第2番 イ短調 BWV1003

Sonata for Violin Solo No.2 in A minor, BWV1003

⑩ 第1楽章: Grave

[3:51]

⑪ 第2楽章: Fuga

[8:11]

⑫ 第3楽章: Andante

[5:49]

⑬ 第4楽章: Allegro

[5:40]

オーレル・ニコレ(フルート) (1-3)
Aurèle Nicolet, flute

マンフレート・クレメント(オーボエ・ダモーレ) (4-6)
Manfred Clement, oboe d'amore

ゲルハルト・ヘツェル(ヴァイオリン) (1-3, 7-13)
Gerhart Hetzel, violin

ヴァルター・フォルヒエルト、ルーベン・ゴンザレス(ヴァイオリン) (7-9)
Walter Forchert, Ruben González, violins

カール・リヒター(チェンバロ) (1-9)
Karl Richter, harpsichord

ミュンヘン・バッハ管弦楽団 (1-9)
Münchener Bach-Orchester

指揮:カール・リヒター (1-9)
Conducted by Karl Richter

録音: 1958年5月7-9日 ベルリン、イエス・キリスト教会 (10-13)
1980年6月2-5日 ミュンヘン、ヘルクレスザール (1-9)

ウィーン・フィルの名物コンマスだったヘツェルの
バッハ:無伴奏ソナタ第2番が世界初CD化!

1970年代から90年代にかけてウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の名物コンサート・マスターとして活躍したゲルハルト・ヘツェル(1940-92)の珍しいバッハ／ソロ録音集です。旧ユーゴスラヴィア出身で、ウィーン出身の名ヴァイオリニスト、ヴォルフガング・シュナイダー・ハン(1915-2002)に師事し、1961年のミュンヘン国際音楽コンクールのヴァイオリン部門に第3位入賞しています。

この間の貴重な録音がドイツ・グラモフォンに残されていました。1958年5月7-9日にベルリン、イエス・キリスト教会で録音されたバッハの無伴奏ヴァイオリン・ソナタ第2番です。1962年にドイツ産業連盟(BDI)が主宰する文化委員会の受賞記念LPレコード(モノラル)として世に出ただけの希少音源で、この度マスター・テープを請求したところ何とステレオ録音で保管されていたことが分かりました。ヘツェル18歳時の録音で、後年の味わい深さはありませんが、瑞々しい音色による気品高い演奏からは「栴檀は双葉より芳し」との諺が思い浮かびます。

同じ頃にフェレンツ・フリッチャイ(1914-1963)率いていたベルリン放送交響楽団のコンサート・マスターとなったヘツェルは、1969年10月、名指揮者カール・ペーム(1894-1981)の推薦でウィーン・

フィルのコンサート・マスターとなります。ユーゴスラヴィア人奏者の就任は異例でしたが、シュナイダー・ハン、ウェラーの独立、ボスコフスキ、パリの引退で、当時のウィーン・フィルはコンサート・マスターの人材難に悩まされていた背景がありました。ヘツェルはその重責を担うため猛練習を行い、数年後にはウィーン・フィルに欠かせない顔となります。

1980年9-10月にかけてウィーン・フィルはペームとの最後の来日を果たしますが、ペームのわずかな棒の動きに反応し仲間にサインを送るコンサート・マスターのヘツェルの姿は極めて印象的でした。当CDに収められたカール・リヒター(1926-1981)とのバッハ／協奏曲集はその直前1980年6月にミュンヘンのヘルクレスザールで録音されました。奇しくもリヒターの最後の録音となったのです。晩年のリヒターのじっくりしたテンポに乗って、ヘツェルはモダン楽器、モダン奏法を駆使しコクのある音色と巧みな節回しで、実に味わい深い演奏を聴かせています。フルートはバッハを得意とする名手オーレル・ニコレ(1926-)で、その真摯で純粋で内面的な演奏は、リヒター、ヘツェルとともに至高の音楽的対話を聴かせてくれます。

2014年10月 板倉重雄

J.S.バッハ

フルート、ヴァイオリンとチェンバロのための協奏曲 イ短調 BWV1044

ヨハン・セバスティアン・バッハ（1685-1750）はヴァイマル宮廷楽団のヴァイオリン奏者、アルンシュタットのオルガニスト、ミュールハウゼンのオルガニスト、ヴァイマル宮廷のオルガニストを経て、1717年にケーテンの宮廷楽長となった。そしてバッハは1723年から1750年に亡くなるまでライプツィヒの聖トマス教会付属学校のカントル（合唱長）、市の音楽監督を務めることになり、この「ライプツィヒ時代」にその筆から、受難曲やカンタータをはじめとする教会音楽の傑作の多くが生み出されたのだが、市参事会、大学、教会との対立の連続で、気の休まる間もなかったという。そうした中1729年から42年にかけて、テレマンが1702年に創設した音楽家や大学生から成る演奏グループ「コレギウム・ムジクム」の指揮を担当した。バッハは週1回コンサートを開くこのグループのためにチェンバロのための協奏曲など大量の作品を書いている。この《フルート、ヴァイオリンとチェンバロのための協奏曲》もそのひとつで、ヴァイマルの宮廷オルガニスト時代（1708-1717）に作曲したチェンバロのための《前奏曲とフーガ》イ短調BWV894（第1、3楽章）、ライプツィヒ時代の1727年頃に作曲したオルガンのための《6つのトリオ・ソナタ》の第3曲ニ短調BWV527の第2楽章（第2楽章）を編曲して作られた。

その時期ははっきりとしていないが、1730年以降と考えられている。

オーボエ・ダモーレ協奏曲 イ長調 BWV1055a

現存する13曲のチェンバロのための協奏曲（1台用7曲、2台用3曲、3台用2曲、4台用1曲）も「コレギウム・ムジクム」での演奏を目的に書かれた。だがバッハには新たに書き下ろす時間ではなく、2台のチェンバロのための協奏曲ハ長調BWV1061を除いて、原曲はすべて判明しているわけではないが、自作、あるいは他の作曲家の作品からの「編曲」でまかねられた。1720年頃に登場した、オーボエより短3度低いイ調の楽器であるオーボエ・ダモーレを独奏楽器としたこの協奏曲はおそらくケーテン時代の後半からライプツィヒ時代の初めに書かれたものと考えられているが、その楽譜は失われた。1740年頃に「コレギウム・ムジクム」での演奏を目的に書かれたと思われるチェンバロ協奏曲第4番イ長調BWV1055はこのオーボエ・ダモーレ協奏曲を編曲したものと考えられている。今では楽譜が失われてしまったバッハ作品のいくつかは、作曲者自身が“編曲版”を作っていたため、のちに復元することが可能となったのである。

3つのヴァイオリンのための協奏曲 ニ長調 BWV1064a

バッハのヴァイオリン協奏曲は3曲残されている。

イ短調BWV1041、ホ長調BWV1042、それに2つのヴァイオリン用のニ短調BWV1043である。いずれも協奏曲の作曲と演奏がその職務のひとつであったケーテン宮廷楽長時代に作曲され、のちにライプツィヒ時代に手が加えられたのではないかと考えられている。バッハはこの3曲のほかにヴァイオリン協奏曲を5曲作曲したとも言われているが、これらの楽譜は現存していない。現在では1730年代後半に書かれた3台のチェンバロのための協奏曲ニ長調BWV1064はそのうちの1曲、3つのヴァイオリンのための協奏曲を編曲して出来上がった作品と考えられている。

無伴奏ヴァイオリン・ソナタ 第2番 イ短調 BWV1003

J.S.バッハは1717年から23年にかけての「ケーテン宮廷楽長時代」に低声部楽器をもたないひとつの楽器のみによる6曲から成る曲集を2つ書いた。《無伴奏ヴァイオリン・ソナタとバルティータ》BWV1001-6と《無伴奏チェロ組曲》BWV1007-12で、いずれもこの宮廷楽団のすぐれた奏者のために書いたと考えられており、前者は1720年に作曲された。

《無伴奏ヴァイオリン・ソナタとバルティータ》は第1番、第3番、第5番が緩一急一緩一急という「教会ソナタ」の楽章構成によって書かれており、第2番、第4番、第6番はアレマンダ（アルマンド）、コレント（ク

ーラント）、サラバンダ（サラバンド）をはじめとするいろいろな舞曲で構成される（第6番のみ「前奏曲」で開始される）「室内ソナタ」の形で書かれており、こちらのほうは楽章の数は4、5、7となっている（当時「バルティータ」は「組曲」の意味で使われていた）。この楽器について熟知していたバッハはさまざまな和音により、ヴァイオリンという楽器の可能性を最大限に發揮させるように書いており、弾き出される響きはたいへん豊かで、その内容は大きくて深く、3曲のソナタの第2楽章はいずれもフーガで書かれている。しかしこれらの作品は長い間「教則本」とみなされ、メンデルスゾーンやショーマンは「伴奏部」を作曲したという。

2番目のソナタであるイ短調BWV1003は「グラーヴェ」「フーガ」「アンダンテ」「アレグロ」から出来ている。「グラーヴェ」に漂う悲愴的な響きは、1720年の7月に妻のマリア・バルバラを亡くした悲しみが反映しているのだろうか。289小節に及ぶ「フーガ」は他の2つのソナタのそれ以上に絶賛されている名品である。この作品のクラヴィーア用編曲（ニ短調、BWV964）はJ.S.バッハ、あるいはその長男のヴィルヘルム・フリードマン・バッハによってなされた。

長谷川勝英

©2014 (BWV1003のみ)
(BWV1044, 1055a, 1064aは既発売のCDより転載いたしました)

演奏者について

カール・リヒターは1926年10月15日、ドイツのブラウエンに生まれた。ドレスデン聖十字架教会の聖歌隊でルドルフ・マウエルスベルガーに学び、1946年にライプツィヒ音楽院に入學し、オルガニストでトーマス教会のカントル、カール・シュトラウベらに師事した。1951年にミュンヘン・バッハ合唱団を、そして1955年にはミュンヘン・バッハ管弦樂團を結成した。1956年にアンスバッハのバッハ音樂祭に参加し、アメリカにも演奏旅行して注目を浴びた。J.S.バッハ作品の演奏・録音にすぐれた功績を残した。1969年に初来日し、《マタイ受難曲》をはじめとしたコンサートを開いたが、2度目の来日直前、1981年2月17日にミュンヘンで世を去った。

オーレル・ニコレは1926年1月22日、スイスのヌシャテルに生まれたフルート奏者で、チューリヒ音楽院でアンドレ・ジョネ、パリ音楽院でマルセル・モイーズに学んだ。1948年のジュネーヴ国際コンクールで第1位となり、1950年にベルリン・フィルハーモニー管弦樂團の首席フルート奏者となった。1959年にこのポストを辞し、独奏者、室内樂奏者として幅広いレパートリーで活躍を続けた。20世紀を代表する名フルート奏者のひとりである。

マンフレート・クレメントは1934年9月27日、ドイツ、ザクセン州のシェラーハウに生まれたオーボエ奏者で、ドレスデンのウェーバー音楽大学で学んだ。マイセン市立劇場管弦樂團、チューリンゲン

交響樂團、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦樂團で活動した。西ドイツに亡命後バイエルン国立歌劇場管弦樂團の首席奏者に就任し、1959年にはミュンヘン・バッハ管弦樂團に加わった。1980年からはバイエルン放送交響樂團の首席奏者として活躍した。2001年4月30日にドイツで死去した。

ゲルハルト・ヘツェルは1940年4月24日、ユーゴスラヴィアのノヴィ・ブルバスに生まれたヴァイオリニ奏者で、ヴォルフガング・シュナイダー=ハンに師事した。ルツェルン音樂祭弦樂合奏團のメンバーとなつたあと、1963年にベルリン放送交響樂團のコンサート・マスター、1969年からウイーン・フィルハーモニー管弦樂團のコンサート・マスターを務めたが、1992年7月29日、ザルツブルク近郊の山を登山中転落して死去した。

長谷川勝英

Executive Producer: Dr. Gerd Ploebisch (1-9)

Recording Producers: Dr. Gerd Ploebisch (1-9), Helmut Elbl (10-13)

Balance Engineers: Hans-Peter Schweigmann (1-9), Helmut Elbl (10-13)

Recording Engineer: Wolf-Dieter Karwatsky (1-9)

Editors: Jürgen Bulgrin & Christopher Alder (1-9)

Tower Records Vintage Collection +plus Vol.19

Production selection & direction: Susumu Kitamura, Shigeo Itakura (Tower Records Japan Inc.)

Artwork design: Yumiko Seo

Editors: Takeshi Doke, Kazumi Tamura (Universal Music LLC)

Product manager: Kaoru Abe (Universal Music LLC)

タワーレコード・オンライン・クラシックサイト はこちら→<http://tower.jp/classic>



JOHANN SEBASTIAN BACH

Sonate für Violine solo Nr. 2 a-moll, BWV 1003

1. Satz: Grave · 2. Satz: Fuga · 3. Satz: Andante · 4. Satz: Allegro

Gerhart Hetzel, Violine
Stipendiat des Kulturreises im BDI

GISELHER KLEBE

Stipendiat des Kulturreises im BDI

Römische Elegien op. 15 (1952)
für Sprecher, Klavier, Cembalo und Kontrabass
nach Johann Wolfgang von Goethe

Bernhard Minetti, Sprecher · Carl Seemann, Klavier
Edith Picht-Axenfeld, Cembalo
Franz Ortner, Kontrabass
Dirigent: Rudolf Albert

Jahresgabe 1962 des Kulturreises
im Bundesverband der Deutschen Industrie e. V.



Gerhart Hetzel

〈取り扱い上のご注意〉●ディスクは両面共、指紋、汚れ、キズ等を付けないように取り扱って下さい。●ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布で内周から外周に向かって放射状に軽くふき取って下さい。レコード用クリーナーや溶剤等は使用しないで下さい。●ディスクは両面共、鉛筆、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を書いたり、シール等を貼付しないで下さい。●ひび割れや変形、又は接着剤等で補修したディスクは、危険ですから絶対に使用しないで下さい。
〈保管上のご注意〉●直射日光の当たる場所や、高温・多湿の場所には保管しないで下さい。●ディスクは使用後、元のケースに入れて保管して下さい。●プラスチックケースの上に重いものを置いたり、落したりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。

Gerhart Hetzel wurde am 24. April 1940 in Neu-Werbaß in der Batschka geboren. Den ersten Violin-Unterricht erhielt er mit fünf Jahren und wurde 1947 Schüler von Professor Otto Kohn in Magdeburg, der 1948 mit ihm das Doppelkonzert für zwei Violinen von J. S. Bach zur Feier des 200. Todestages von Bach in Magdeburg spielte. 1952 nahm ihn Professor Wolfgang Schneiderhan in seine Meisterklasse in Luzern auf. Aufgrund eines Vorspiels beim Kulturkreis im Bundesverband der Deutschen Industrie förderte Herr Dr. Günter Hende die weitere Ausbildung des jungen Künstlers, die 1957 mit dem Diplom der Meisterklasse mit «besonderer Auszeichnung» abgeschlossen wurde.

Von 1956 an war Gerhart Hetzel Mitglied der «Festival Strings Lucernes» bis 1961 und ging mit diesen auf Reisen, so zu den Salzburger Festspielen, dem Casals-Festival in Prades, nach Persien usw. und trat als Solist neben Professor Schneiderhan im Triekonzert von Bach auf. 1958 war Gerhart Hetzel Solist bei den Berliner Philharmonikern und hatte Gelegenheit zu Konzerten in Amsterdam, Utrecht, Luzern und Essen und bei mehreren Sendern. Generalmusikdirektor Sawallisch holte ihn als Solist eines Konzertes der Hamburger Philharmoniker. Klaus Wagger schreibt darüber in «Melos», Heft 5, 1962: «Dieser Einundzwanzigjährige kann morgen schon unter den grossen Geigern der Welt sein». Dazu soll auch das Stipendium des Kulturreises im Bundesverband der Deutschen Industrie helfen, mit dem Hetzel 1962 ausgezeichnet wurde. Seit 1959 ist Hetzel Assistant von Professor Schneiderhan an dessen Meisterklasse in Luzern.

* *

Giselher Klebe wurde am 28. Juni 1925 in Mannheim geboren. Er studierte am Berliner Städtischen Konservatorium (Komposition: Kurt von Wolffurt). Nach Wehrdienst und Kriegsgefangenschaft war er ab 1947 Kompositionsschüler von Boris Blacher und Josef Rufer in Berlin. 1952 erhielt er den Berliner Kunstpreis. Der Kulturreise im Bundesverband der Deutschen Industrie zeichnete ihn 1953 mit einem Stipendium aus. 1959 erhielt er den grossen Kunstspreis des Landes Nordrhein-Westfalen. Seit 1957 ist



Giselher Klebe Nachfolger Wolfgang Fortners an der Detmolder Musikakademie. – Zwischen 1947 und 1957 hat Klebe etwa 35 Werke, fast alle Gattungen ausser Film- und Kirchenmusik, geschrieben. Zu seinen Römischen Elegien nach Goethe sagt er: «Im Sommer des Jahres 1952 regte mich Dr. Heinrich Strobel an, ein Stück für Sprecher und kleinere Besetzung zu schreiben. Dabei sollte die Komposition die problematische Form des Melodrams umgehen, indem die musikalische Anlage bei engster Bindung zum Inhalt des Sprechtextes nicht einem emotionalen Phantasieren überlassen bleiben, sondern eine in diesem Rahmen optimal mögliche Selbständigkeit in ihrer Struktur erreichen sollte ... Den Sprachrhythmus der Dichtung liess ich unverändert und legte der musikalischen Struktur die unveränderten zwanzig Elegien zugrunde. Zuvor hatte ich aus den zwanzig Elegien fünf ausgewählt, die in der Reihefolge I, XII, VII, V und XX einen inhaltlich geschlossenen Zyklus bildeten. Die musikalische Gestaltung fasste die Elegien I und XII, die Elegie VII und die Elegie V und XX zu drei Sätzen zusammen, die inhaltlich und durch zeitlich proportionale Entsprechungen mit dem Text verbunden, eine selbständige rein musikalische Strukturierung erhalten.»

Dieses Langspielplatte der Deutschen Grammophon Gesellschaft darf nur auf einem Wiedergabeplatten für 33 U/min (epn) wieder mit einem Leichten Tonabnehmer ein Mikrophon, dessen Auflagegewicht 8 bis 10 g beträgt, oder mit einem Starken Tonabnehmer abgespielt werden. Unschärfe Tonabnehmer sind auf M (Microphone) einstellbar. Abgleich-Bedienung nur für Deutschland! Die Überprüfung unserer Schallplatten sowie die Überprüfung von Rundfunksendungen unserer Schallplatten auf Boot oder Boot, auch zu privaten Gebrauch, ist verboten. Zur Verhinderung weiterer Überproduktionen wird das Hersteller Verbot, Verwertung und Ausweitung nicht erlaubt.